

◆新年おめでとうございます。とはいえ、世の中どうもそういう雰囲気ではない。戦いは終わらないし、日本も軍備を増強しようとしている。堂々と議論すればいいのに、国会で審議しないのはなぜだろうか。釈然としないまま、国のだいたいな決定がなされていくことに恐れを抱いている。新型コロナウイルスへの対処についても今後どうなるのか不明だ。ただひとつ言えることは、自分の体は自分で考えて守っていくしかないということである。

今回、神村ふじをさんのエッセイはお休みです。

◆ときどきミシン仕事を楽しんでいる。コロナ騒動が始まって、布のマスクを作ったのがきっかけだった。作れるかもしれないと簡単な洋服を作ってみたら、じつに着心地がいい。バッグは買うものだと思っていたが、好きな柄や形を選んで作れるのだ。最近生地もインターネットで注文することが多い。セールは季節が終わるころにあるから、吟味して買ってもいざ作ろうとしたら次の季節に向かっている、なんだか気乗りしないこともある。そんなときは一年寝かす。大きいものを作ると必ず端切れが出る。それを使って小物を作る。色や形の組み合わせを考えるのが楽しい！作り方はネットで検索すれば動画がたくさんある。創意工夫する人の動画はどんどん進化することに驚かされる。端切れで巾着やポーチが出来上がり、生地を使い切ったと思うと余計にうれしい。む

かし使ったスキー用のポンチョがまだ取ってあった。あれこれデザインを考えて、大ぶりの軽いエコバッグができたときは快哉を叫んだのだった。

何かを生み出すときには集中力がだいじだ。集中力のエネルギーは、そう長く続くものではない。たまには休憩も入れながら、壁に突き当たってもしばらくしてまた歩き出す。何かが生まれたとき、そこに小さなよろこびを見つけられればいいのではないかと思う。

〈おすすめ本〉

・『ルポ 誰が国語力を殺すのか』（石井光太、文藝春秋、二〇二二年七月）

（題名の印象は、いい意味で裏切られた。国語力とは生きるための力そのもの。いま子どもたちがどんな状況で生きているのか、わたしたちは知らなければならぬ。後半に出てくる取り組みに光が見える）

・『太陽の子―日本がアフリカに置き去りにした秘密』（三浦英之、集英社、二〇二二年十月）

（わたしは新卒で、この本に出てくる非鉄金属・石油の会社の資料室に半年ほど勤務した。旧ザイルという国名はよく聞いた。ミステリーのように読めるが、実際にあったこと。著者の粘りには脱帽だ）

・『聞き書き 世界のサッカー―スタジアムに転がる愛と差別と移民のはなし』（金井真紀、カンゼン、二〇二二年十一月）

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊展景
108号

二〇二三年一月二十五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七―二〇二

info@muninokai.com